

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：
歴史と記憶を生きる眼差しから見る現代の場所性：
変容するローカルな場所性とせめぎ合う眼差し：
記憶と現在の間：
ローカリティのあらわれの場としてのストリート：
南ドイツにおける樹木儀礼の事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 香織 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001209

ローカリティのあらわれの場としてのストリート 南ドイツにおける樹木儀礼の事例から

山田 香織
在ドイツ日本国大使館

ドイツ語圏でいまもさかんにおこなわれているメイポールという慣習行為は、キリスト教の展開以前のヨーロッパの宗教的古層を現在に伝えるものとして解釈されてきた。その一方で、私がフィールドワークをおこなったミュンヘン近郊のA町では、このメイポールの奪い合いをめぐるって生じた1950年代の出来事を機に町内の2集落が対立し、和解に至るまでに約20年を要したという過去がある。

本稿では、メイポールの慣行を記述するとともに、この対立から和解以後までのプロセスをたどり、当事者によるこの行事の解釈の読み替えのありようを分析し、ストリートという場の意味を考える。

1 はじめに	3 メイポールに関する解釈
2 メイポールという慣行	4 解釈の読み替え
2.1. 撤去から運び出しまで	4.1. メイポールをめぐる対立
2.2. 運び出しから立て替えの前日まで	4.2. 和解とその後
2.3. マイバウムの見張り	5 おわりに
2.4. マイバウム立て	

キーワード：ドイツ、メイポール、ローカリティ、解釈の読み替え

1 はじめに

メイポールという慣習行為がある。ドイツ語圏を中心に中欧にひろく存在するこの慣行は、キリスト教の展開以前のヨーロッパの宗教的古層を現在に伝えるものとして、解釈されてきた。その意味では、これは過去の人びとの宗教世界を現在に伝える、すぐれた民俗的慣行ということになる。

その一方で、私がフィールドワークをおこなったミュンヘン近郊のA町では、このメイポールの奪い合いをめぐるって生じた1950年代の出来事が、その後も長く尾を引いて、この町の底流にある2つの集落の対立を顕在化させてきた。その意味では、メイポールの慣行は、単に過去を現在に伝えるものではなく、現代ドイツを生きる人びとにとって、自分たちの社会的あり方を解釈するためのテキストとして機能しているといえることができる。

メイポールとはいかなる慣習であり、それをめぐっていかなる解釈が与えられてきた

のか。ここでは、バリの人びとが熱狂する闘鶏というテキストをめぐって、社会学的解釈や心理学的解釈、そして解釈の技法そのものにかかわる解釈を重ねていく。C. ギアツの『文化の解釈学』を参考にしながら（ギアツ 1987）、南ドイツでいまなおつづけられているメイポールという慣行を読み解いていく。最初に、この慣行の内容を具体的にテキストとして示した上で、まずそれに対する神話学ならびにドイツ民俗学の古典的な解釈を示し、つぎに、その社会学的解釈をおこなう。そして最後に、A 町で生じたメイポールをめぐる対立が和解へと向かうプロセスをたどることで、人びとが社会的につくり出されたテキストを、どう読み替えることで操作可能なものとしていくかを示していく。

メイポールは、自治体を構成する各集落のストリートに立てられていることが非常に多い¹⁾。したがって、これはストリートの実践といえる。そこでおこなわれる実践に対して与えられてきた解釈をさまざまな視点から見ていくことで、人びとがストリートをどのようなものとしてとらえてきたか、それを生活のなかにどのように位置づけてきたか、が理解されるようになるだろう。結論を先取りしていえば、本報告でとりあげるメイポールを介したストリートの実践からは、人びとのローカリティに関する解釈とそれが社会的変化にともなって変化していく様子を見て取ることができる。そうした状況が表出するストリートとは、人びとの生活の奥深くにある解釈や実践が顕在化する場である。

2 メイポールという慣行

ドイツでは、メイポールはマイバウム (Maibaum) と称される。これは、森で伐採し、加工した 30 メートル前後の樹木 (バウム: Baum)²⁾ を集落や自治体に立てる慣行が、5 月 (マイ: Mai) 初めに行なわれることに由来する。

この慣行には、森で伐採したのちに、樹皮を剥ぎ、乾燥させ、色を塗り³⁾、装飾を施して、5 年に 1 度立て替えるものと、伐採後すぐに樹皮を剥ぎ、リースをつけるだけで、毎年立て替えるものがある。前者は、おもに南ドイツバイエルン州内南部のオーバーバイエルン地方でよく見られ、後者は、これ以外のバイエルン州内やオーストリアで見られる。一連の立て替えプロセスは、前者で数ヶ月、後者の場合には 1 日もしくは数日を費やす⁴⁾。担い手は、未婚男性からなる青年団 (Burschenverein)、自警消防団 (Freiwillige Feuerwehr)、地域の習俗の継承を活動目的とする伝統保存団体 (Trachtenverein) といったローカル・アソシエーションや地域の有志である。準備や立て替え後に披露するダンスの踊り手として女性もこの慣行に関わるが、取り仕切るのは男性である。

では、立て替えはどのようにおこなわれるのか。ここでは、本稿で論じる集落間の対立の契機となったマイバウムの盗み合いをともなう、立て替えに数ヶ月を要する前者の

プロセスを、筆者がA町で得たデータをもとに述べていく⁵⁾。本題に入る前に、A町の概況にふれておこう。

A町は、ドイツ南部のバイエルン州の州都ミュンヘンから南に約10キロのところに位置する、人口約12,400人(2007年6月現在)の自治体である。第二次大戦以前は耕地が広がり、主な生業は農業と林業だったこの自治体は、戦後、宅地造成が進み、今日ではミュンヘン近郊の住宅地となっている。しかも、1960年代後半以降、景観保全と緩やかな人口増加を意図した町づくりを展開したことから、この町は高層建築物のない、屋根を朱色に統一した、遊歩道や小川や森林の残る牧歌的な雰囲気と漂わせた住宅地の様相を呈している(Gemeinde Oberhaching 1999)⁶⁾。

行政の最小区分単位はゲマインデ(Gemeinde)であり、A町はこれに該当するわけだが、町のなかにはさらなる地域区分が存在する。集落(Ortsteil)である。現在9集落があり、北部に4集落、南部に5集落が点在している⁷⁾。集落という単位は、行政区分ではないが、この自治体を捉えるのには有効である。たとえば、宅地と公共施設は、9集落のなかでも当初からこの町を構成している北部3集落、とくにそのなかでも、あとの議論でも取り上げるO集落とD集落に集中している。あるいは、この地域では元来カトリックの信仰が篤かったことから、自治体のなかだけでもカトリック教会が4つあるが⁸⁾、教区は集落単位で区切られている。そして、A町ではメイポールを5ヶ所で見ることができるが、この慣行はいずれも集落ごとにおこなわれている。

2.1. 撤去から運び出しまで

A町O集落では、12月上旬に古いマイバウムが撤去される。作業は、集落の中心である教会前のストリートに立てられているマイバウムに飾られている職人人形(Zeichenfigur)⁹⁾と銘板(Tafel)¹⁰⁾と風見鶏(Wetterhahn)¹¹⁾をはずすところからはじまる。地上約10メートルのところに飾られている銘板と職人人形は、青年団のメンバーがはしご車で上って取り外す。先端に付いている風見鶏は、はしご車でその近くまで上り、先端をチェーンソーで切断し、切り離す¹²⁾。それらが外されると、マイバウムを固定する支柱のボルトが抜かれ、ショベルカーでマイバウムを一押しする。すると、マイバウムは、石畳に叩きつけられ、轟音が上がる。倒された30メートル以上の長さのあるマイバウムは、1メートルほどの長さに切り分けられ、近くの農家の納屋に運び込まれる¹³⁾。

12月下旬には、マイバウム用の木が伐採される¹⁴⁾。筆者が調査をおこなった年のマイバウムは、この集落のK農家によって寄付された。この農家は、自宅から約5キロのところに森林を所有していて、青年団はそこで適当な木を伐採することを許された。

伐採の日、まず、青年団のメンバーであるこの家の息子と、5月王(Maikönig)と呼ばれる、立て替えの一切を取り仕切るメンバーが、木を探しに森に入った¹⁵⁾。その間、他のメンバーは、立て替え準備の拠点であるK農家の納屋で、風見鶏と旗を固定する

ための金具を、古いマイバウムの先端から取り外していた。1時間ほどして2人が森から戻り、マイバウムに適した木があったことを報告すると、今度は全員で森に向かった。

目当ての木のある場所に到着すると、その木をどの方向に倒すのかが確認され、周囲にある枝や小さな木が切り払われた¹⁶⁾。その間に、伐採経験が豊富でこの青年団の元メンバーである男性がやってきた。メンバーに倒す方向を確認すると早速、持参したチェーンソーで木に切れ目を入れた。ほどなくして木は傾き始めた。しかし、途中で先端がまわりの木に引っかかってしまった。そこで、その木に鎖を巻きつけトラクターで引っ張った。するとその木は倒れた。だが、先端が裂けてなくなっており、長さは30メートルに満たなかった。30メートル以上の木を望んでいた5月王の判断で、もう1本伐採することになった。2本目は難なく倒すことができ、33メートルの長さがあったので、全員一致でこちらをマイバウムにすることにした。

倒された木は、その後約2ヶ月間、森に放置される。ただし、そのまま置いておくと凍ってしまい、マイバウムとして使いものにならなくなってしまふ。そこで、伐採直後に枝が全て切り落とされ、樹皮が剥がされ、木の下には枕木が敷かれた。

3月上旬、森から木を運び出す。2001年、A町D集落の青年団は、S農家の敷地を借りて木を加工することにした。運び出しの当日、彼らは森に入る前に納屋の横にブロックと板を組み合わせて、木を置く土台を整えた。木が運び出されると、その日の晩からマイバウムの見張りが始まるので、そのための移動式コンテナ、木に照らすための照明器具、簡易トイレも準備した。

トラックの荷台に乗り込んだ彼らは、フォークリフト、2頭の馬、台車とともに森に入った。12月に倒して樹皮を剥いでおいた木を、鎖でフォークリフトにつなぎ、傷をつけないよう慎重に林道に引っ張り出して台車に乗せ、それを2頭の馬に牽引させた。約5キロの林道を抜けて一般道に出ると、彼らは台車に乗せた木にまたがった。パトカーと自警消防団による交通規制の下、プラスバンドを先頭に、観衆に見守られながらS農家までの約2キロを行進した。

2.2. 運び出しから立て替えの前日まで

運び出された木は、加工される。最初に施されるのは整形である。S農家の納屋の横に準備された土台の上に置かれた木は、まず手動の鉋を使って茶色くなった表面を簡単に削られた。そのあと、大工と大工見習いのメンバーが中心となって、バランスと太さを見ながら電動式の鉋で手際よく削っていった。この作業には約3週間で費やされた。

整形が終わると、次は塗装である。D集落のマイバウムの塗装は、町内の各集落のマイバウムの色づけを25年以上請け負ってきた元塗装工の男性がおこなった。表面を削る作業が終わり、木が十分に乾燥したのを見計らって、4月に入ると彼は作業を始めた。まず、白いペンキが全体に数回塗られ、その上をラッカーで塗装した。十分に乾くと、

木に2本の細い紐が50センチ間隔でらせん状に巻きつけられ、その間を青色ペンキで塗った。すると青と白のらせん模様が現れた。ペンキが乾いてから紐が外されると、今度は、下部に青色と白色でひし形の模様が描かれた。それが乾くと、ひし形模様の下には緑色のペンキが塗られ、ひし形模様の上には握手をしている手が描かれた。作業には約3週間がかかったが、この男性がほとんど1人でやった。彼はこのほか、塗装と平行して装飾具の色づけもおこなった。D集落のマイバウムには、風見鶏、10個の職人形¹⁷⁾、6枚の銘板¹⁸⁾が飾りつけられている。これらはいずれも金属製で、立て替え毎に新調するのは手間と費用がかかるため、修繕と塗装を繰り返して使用している。

このマイバウムには、このほかに、ギルランデ (Girlande) とリース (Kranz) が飾り付けられる。前者は、トウヒの枝を束にして長く繋いだもので、マイバウムの下部にらせん状に巻きつけられる。後者も、生のトウヒの枝を使って作られるもので、こちらは、マイバウムの上部に付けられる。生の枝を使うこれらは、マイバウムを立てる前日に集落の女性たちが作り、当日装飾され、すぐに乾燥してしまうので数週間後には取り外される。

彼が塗装をしている傍らで、青年団のメンバーたちはマイバウム立てで使う棒を揃え、その棒を掛けるための16本の杭を木に取り付け、木の切断部分に直径約50センチ、幅約10センチの金属製のリングをはめ、先端部分に旗を吊るすための金具を付けていた。ほかに、マイバウム立てとその翌日のダンス披露を告知する看板やポスターを準備した。縦1メートル、横2メートルの看板は、自分たちで周辺自治体に通じる道路横の掲示版に掲げ、ポスターは町内と周辺自治体の掲示板に貼った。また、ダンスの練習もした。D集落ではマイバウムを立てた次の日に、青年団のメンバーと彼らがパートナーに選んだ集落に居住する未婚女性が、マイバウムの周りでダンスを踊るのが恒例となっている。そこで、彼らは地元の伝統舞踊保存団体に指導を仰ぎ、ワルツ1曲とこの地方特有のダンス2曲の練習を、毎水曜日の夜に約2時間、1ヶ月間続けた。

2.3. マイバウムの見張り

担い手たちはさらにマイバウムの見張りをおこなう。木を森から運びだしてから4月30日にマイバウムを立てるまでの約50日のあいだに、ただの木はこうしてマイバウムへと変貌していくわけだが、このように加工に時間を費やす地方では、周辺の集落の青年団がマイバウムを盗む習慣がある。筆者の調査地でもその慣行は残っていて、森から運び出されたその日の晩から、所定の場所に立てられるまでの間、マイバウムは盗まれる危険にさらされていた。

マイバウムの盗み合いに関しては、青年団の間でそのやり方が口頭で決められている。D集落青年団と周囲の青年団の取り決めは、①昼間はマイバウムを盗んではならない、②マイバウムを運び出したとしても、集落間の境界を越えていなければ盗んだこと

にはならない、③盗まれたマイバウムを取り返すには、盗まれた青年団が盗んだ青年団にビールとパンを振る舞わなければならない、というものだった。

マイバウムが盗まれるということは、青年団、ひいてはその集落の恥である。また、盗まれたマイバウムを取り返さなければ、その集落にはその年マイバウムが立たないことになる¹⁹⁾。したがって、盗まれた場合には、予定外の出費を強いられても、マイバウムを取り返すのだという。そして、恥と無駄な支出を回避するために、徹夜で見張りをおこなうのである。

D集落青年団では2人体制で見張り番をつけていた。見張り用に、暖炉を備えた移動式コンテナがマイバウムの横に設置されていたので、当番は暖をとりながら夜8時から翌朝6時まで一睡もせずそこで過ごしていた。とはいえ、彼らは一晩中マイバウムを監視しているわけではなかった。コンテナには、メンバーや元メンバー、友人やメンバーの彼女が毎晩のようにやってきて、歓談をしたり、カードゲームをしていて、マイバウムには時折目をやる程度だった²⁰⁾。

そしてその隙を狙ったのか、筆者が調査をおこなった年にもD集落のマイバウムは隣接するいくつかの集落の青年団に数回盗まれかけた。盗むふりをして見張り番のところに顔を出しただけの青年団もあったが、本気で盗みに来たところもあった。D集落青年団はこれを受けて、途中マイバウムの保管場所とコンテナの位置を変えた。

2.4. マイバウム立て

木を加工し、装飾具とマイバウム立てに必要な道具を揃え、盗まれずに4月30日を迎えると、いよいよマイバウムは立てられる²¹⁾。D集落では、集落の中心部にある居酒屋の前の広場がマイバウムの定位置になっている。そのため、団員たちはまず、台車とトラクターを使って、30メートルを優に越えるマイバウムをS農家から居酒屋まで移動させた。細い道を慎重に運んでゆき、距離は約1キロだったが2時間ほどかかった。

広場に到着したあと、先端に風見鶏が、上部にリースが取り付けられると、50人ほどの男たちが年輩の大工職人の男性の掛け声にしたがいながら、2本1組の棒を巧みに操作して徐々に立てていった²²⁾。作業を始めてから1時間半後、5ヵ月半ぶりにマイバウムがその場所に姿を現すと、詰めかけた聴衆のあいだから拍手が起こった。

その後、メンバーが自警消防団のはしご車に乗り込み、職人人形と銘板を高さ10メートルほどのところに取り付けた。マイバウムの塗装をした男性もはしご車で上がり、剥がれた塗装を塗り直した。

マイバウム立てに関わった者たちは、作業を終えるとS農家に移動し、女性たちが作る目玉焼きを食べ、夜のひとときを共に過ごした。この集落では以前から、マイバウムを立てた日の晩に皆で目玉焼きを食べる習慣がある。この料理を食べる理由を彼らは、「以前は、農家から卵を無料でもらうことができたし、目玉焼きにはベーコンとパ

ターを使うから力がつく。だから、マイバウムを立てたあとに食べるんだ」と、説明する²³⁾。

翌日、マイバウムにはギルランデが飾り付けられ、その周りには舞台が作られ、ダンスが披露された。踊り手たちは、ブラカードを持った少年を先頭に、青年団の旗を持つメンバー、民族衣装をまとった5月王と5月女王、そしてバイエルン州の州旗を持ち民族衣装を着た7組の男女の順に整列し、ブラスバンドの演奏でS農家から舞台まで行進してきた。一方、会場では民族衣装を身にまとった観衆が舞台の周囲を埋め尽くし、彼らを拍手で迎えた。踊り手たちが入場すると、5月王と5月女王が寄付した州旗がバイエルン州歌の演奏に合わせてマイバウムに掲揚された。つづいて5月王と5月女王がダンスを披露し、そのあと5月王が新しいマイバウムを立てるまでの経過を報告した。これが終わると7組のペアが舞台上がり、1ヶ月間練習を積んだダンスを披露した。舞台上でのパフォーマンスはこれで終わった。しかし、踊り手たちとそれ以外の青年団メンバーと観衆の一部は居酒屋に移動し、深夜まで饗宴のひとつときを楽しんでいた。

青年団員は、マイバウム立て直後の週末にS農家で片付けをした。見張り用のコンテナと簡易トイレを撤去し、木の削りかすや放置していたゴミを捨て、加工の際に使った土台やビニールシートを納屋にしまい、マイバウム立てに使った棒を解体した。また、その数週間後、準備やダンスに関わった未婚女性たちとS農家で打ち上げパーティーを開いた。

A町ではメイポールが各集落に立てられているが、いずれもこうしたプロセスをたどって5年に一度立て替えられる。しかも、各集落の立て替え年は重ならないようになっている。これは、後述する盗み合いの対象が常に1ヶ所になるよう配慮されてのことだと思われる。

ところで、先行研究では、この一連のプロセスがほとんど詳細に論じられていない²⁴⁾。しかし、立て替えにいたるまでの過程を丹念にみていくと、メイポールがまさに立てられ、ダンスが披露されるハレの瞬間をみているだけでは読み取ることができない、この慣行のもつ社会的機能が浮き彫りになってくる。では、この立て替えプロセスに表出する社会的機能とはいかなるものなのだろうか。次項では、まず従来のメイポールに関する神話学および民俗学的解釈をおさえ、つぎにその社会的機能について論じていく。

3 メイポールに関する解釈

メイポールに関する神話学的研究は、20世紀初頭におこなわれた。これは、メイポールを民族的慣行にし、国民国家形成に利用しようとしたことに由来する。この種の研究では、民族性の裏づけのために、この慣行の根源が探求され、連続性が明示された。なかでもメイポール研究に熱心に取り組んだ神話学者で民俗学者のマンハルトは、その儀礼

の起源を女神ネルトゥスにまつわる森でおこなわれるゲルマンの儀礼に（タキトゥス 1979: 191-198）、木を立てることの原初的意味をネルトゥス信仰や運命樹・生命樹²⁵⁾における共同体の保護と豊饒祈願に見出し、それによってメイポールを古来ゲルマン以来の共同体保護と豊饒祈願のための樹木儀礼と説明づけた（Mannhardt 1904/1905）。この慣行の連続性についてはそのほかに、メイポールの慣習は村落の成立時期にまで遡ることができるものであり、これに関する伝説は古代ギリシャ・ローマにまで遡ることができることから、メイポールもそれ以来のものだという主張もある。

メイポールに関する研究はドイツ民俗学でもおこなわれてきた。国民国家の形成や民族性の探求、さらにはナチズムと関係し、神話学と親和的關係にあった戦前のドイツ民俗学では、神話学と同様の方向性をもった分析がなされた。他方、戦後においては、民族性の探求はなされなくなったものの、起源と連続性に関する分析は続けられた。膨大な史料を用いてその歴史の変遷を跡づけたモーザーは、史料にメイポールに関する明確な記述が残されている場合に限って起源と連続性は証明されるという立場に基づくことから、先述の研究者とは見解を異にしている。しかし、それもまた起源と連続性を主題とし、起源を16世紀におき、それ以降は各時代の社会状況を反映する象徴的意味が付与されながら連続してきたと主張している²⁶⁾（Moser 1985）。このほか、起源に関して戦前の研究者と同じ立場をとる研究者もいる²⁷⁾。

戦後のドイツ民俗学ではこのほかに、各地のメイポールとその装飾品について詳述したモノグラフや、旧第三帝国領から旧西ドイツに移住を強いられた被追放民による移住先でのこの慣行の実施の様態に関する記述が著されている。しかもここでも、起源や連続性にかかわる問いが立てられ、豊饒や幸福の祈願をその原初的な意味として論じていることは珍しくない。起源と連続性に対する関心はいまだ高いのである。

これに対し、この慣習の社会的機能に関する分析はあまりなされていない。先述のモーザーは、16世紀から第三帝国期に至るまでのメイポールやこれに類似する樹木立ての象徴性について言及しているが²⁸⁾、戦後におけるこの慣行の社会的意味と象徴性については論じていない。他の先行研究においても、カップハマーが社会の自立と自己理解の象徴と指摘している程度である。彼は1世紀以上前からこれらが示されてきたと断ったうえで、西ドイツ自治体再編が実施された1970年代後半に吸収合併が決定したある自治体の例を挙げ、合併の決定を機にこの慣行が復活し、合併後には感情面で共同体の存続を示す象徴として機能するようになったと分析している（Kapfhammer 1982）。

社会の自立性と自己理解に関する象徴性は、A町の各集落で立てられるメイポールにも見て取ることができる。先述のD集落のメイポールに飾り付けられている銘板には集落内の職人を表す図柄が刻まれているが、これは、この集落に多彩な職人がいて、それによって人びとは自立的な生活を送れる／たことを示唆している。あるいは、メイポールの立て替えは、この慣行に関する知の蓄積、大工・板金工・塗装工・農家をはじ

めとする集落の職人たちの技、集落民の協力によって実現していることから、新たにメイポールが立てられることは、集落民の調和と集落の自立性と自己理解を象徴しているといえる。

ところで、筆者が調査をおこなった地域では、メイポールがいまもなおこうした社会的機能を有しているわけだが、そこに暮らす人びとは、社会の変容に呼応しながら、その機能に関する解釈を読み替えている。具体的にいうと、かつてはメイポールを介して、他の集落の住民に向けて自集落の自立性と自己理解を明示していた。しかし、移住者が増加し、この慣行に一部の住民のみが関わるようになってからは、これを自治体を評価するための指標として、またその担い手である「地元民」の立場を肯定する道具として、用いるようになっている。

こうした解釈の読み替えは、戦後間もない頃にA町内の集落間で生じたメイポールをめぐる対立と和解プロセスに注目しながら、この慣行とこの自治体の変容を時系列に沿って追うことで浮き彫りになる。そこで次項では、対立と和解以後とその社会背景について記述し、解釈の読み替えのありようを明らかにする。

4 解釈の読み替え

4.1. メイポールをめぐる対立

先述のとおりA町D集落の青年団は、①昼間は盗んではならない、②集落間の境界を越えていなければ盗んだことにはならない、③盗まれた際に取り返すには、盗まれた側の青年団が盗んだ側の青年団に無償のビールとパンを振る舞わなければならない、というルールにしたがって周辺青年団とメイポールの盗み合いをおこなってきた。しかし、1950年代半ば²⁹⁾の立て替えの際には、O集落青年団がこれに反して盗み、青年団間の対立、ひいては集落間の対立へと発展したという。以下は、この一件の約10年後にD集落青年団に入会した男性たちによる、それに関する2001年当時の語りである。

(語り1)

この町にはF、O、Dの集落にそれぞれ青年団があるんだけど、1956年にO集落の青年団員がD集落のマイバウムを盗んだんだ。そのときは、見張り番がマイバウムをもっていこうとするO青年団員を見つけたから、やめるように言った。それなのにO青年団員は強引に運びだして、T通りを通って教会の方へ持っていったんだ。普通はストップをかければそこで返してもらえる。なのに、彼らは強引に持っていったんだよ。しかも、止めに入ったD青年団員の1人がマイバウムに挟まれて怪我をしたから、普段のように平和的には収まらなくなった。

その後、D青年団員たちはO青年団のところへ行っただ。それも、刃物を持って戦闘態勢でね。当然喧嘩になったよ。結局、ビールを払って返してもらったが、後味の悪いものだったそうだよ。

(語り 2)

彼ら (O 青年団)³⁰⁾ が最初に始めたんだよ。マイバウムを盗んだけれど、途中だったから間に合ったんだ。それなのに、彼らはマイバウムを引っ張っていった。禁止されているのに。だから、昼間の 1 時半とかに仕事から帰ってきてから、D 集落民が (O 集落と D 集落の境界にある) N 肉屋に集合して、コンテナの中に入って、カギを締めて外から見えないようにして、それでトラックに乗り込んで O 集落へいったんだ。マイバウムの置いてあるところでそのコンテナを開けて、みんなが出てきた。そうしたら、O 青年団員はその横の F 肉屋から長い包丁をもって出てきてきたりして、棒で本当に殴りあったりもした。とにかくひどかった。それは 1940 年代か 1950 年代の初めのことだよ。

(語り 3)

伝統に則ってマイバウムが盗まれたら、それは恥です。けれど、O 集落と D 集落の間のマイバウム戦争のようなことになるよね。あれは、1947 年か 1948 年でしたよ。(O 青年団員が) 大きなはさみを持ってきて、マイバウムを固定していた地面に埋め込んであった鉄の鎖を切断して持っていったんです。そのときに全部の指を骨折した人が出ましたよ。

昼間 D 集落民がマイバウムをとり返しに行ったら、もうそこではマイバウムをめぐる殴り合いですよ。まだあれから 50 年も経っていません。伝統的なことも真剣になると、全くひどいことですよ。

この語りからは、このときの盗みが、ふだんの慣行の域を超えていたことがうかがえる。そしてこの衝突はその後さらに尾を引き、集落間の対立へと発展したという。

(語り 4)

マイバウム盗みに端を発して、以前は非常に大きな問題がありましたよ。それによって O 集落と D 集落は喧嘩別れをした。D 集落民は O 集落へ行ってはならなかったし、O 集落民も D 集落へは決して来なくなった。この衝突はすごく重大なことで、市民戦争のようだった。

(語り 5)

とにかく、O 集落と D 集落はいつも問題があったんだけど、それ (マイバウムをめぐる衝突) 以来、本当の衝突だった。お互いがまったく交わらなくなったんだから。D 集落民は O 集落で買い物をしなくなった。それ (集落の境界) は国境のようだったよ。あれはひどかった。

(語り 6)

教会は O 集落にあって、D 集落民が教会に行ったら、「D 集落のくそが来た」と言われたんだから。彼らが最初に始めたんだ。それは 40 年代か 50 年代初めのこと。それからいつも衝突があった。

(語り 7)

あの時はけが人が出て、血を流した人もいました。それどころか、当時はみんな O 集落の学校へ通っていましたが、D 集落と O 集落の子供達は別々に座っていましたよ。

耕地が多く残るD集落で戦後、宅地造成がすすみ、住民が増加してことを受けて、1970年代後半にD集落にカトリック教会が新たに建てられたことで、D集落民は独自の教区を形成することになった。しかしそれ以前は、O集落民と同一のカトリック教会教区に属していた。しかもその教会はO集落にあったため、ミサや教会行事に参列するにはO集落に行かなければならなかった。また、対立当時、町内には小学校がひとつしかなく、これもO集落にあった。さらに、1960年代までは町役場や警察官の詰め所もO集落にあり、自治体の中心はO集落だった。つまりD集落民は、買い物や寄り合いは集落内で済ますことができたが、行政や教会に関わる用事の際にはO集落に足を運ばざるを得ず、それゆえ、両集落の住民間の深刻な軋轢はそうした折に表面化したのである。

メイポールをめぐる対立とこれに端を発した両集落間の対立は、この当時、自治体という行政単位がすでに存在していたにもかかわらず、実質的なまとまりの単位が集落であったことを示唆している。行政関係の機関と教会を除けば、集落ごとに必要な施設があり、人びとは自立的な生活を営むことができた。また、メイポール立てによる自立性の誇示は、近隣集落に向けてなされていたと考えられる。集落の名誉の象徴であるメイポールをめぐる対立がこれほどまでに深刻な事態を引き起こしたのもこのためである。

4.2. 和解とその後

しかし、この状況は、住民が増加し、ここに暮らす人びとが一様にこの慣行に関与しなくなった1970年代に変化をみせる。まずは、インフォーマントによる和解についての語りを見ておこう。

(語り8)

1976年に自警消防団の詰め所を持つようになって、寄り合い場所が建てられて、私たちはそれからまた一緒になりました。それまでは、消防団もそれぞれF集落、O集落、D集落にあって、集まる時は集落内の居酒屋へ行っていたよ。でも消防施設に寄り合い場所ができてからは、そこに集まるようになって、同じ席につき、飲食を共にするようになった。それでも最初のうちは、F集落民、D集落民、O集落民でそれぞれ固まって座っていた。いまはみんな一緒だけれど、以前は考えられなかった。それは1976年からですよ。

D集落青年団の元メンバーであるインフォーマントは、この施設の建設が和解の重要な鍵になったと話してくれた。たしかにそうだったのだろう。だが、A町の状況に注目してみると、1970年代はこの町が大きな変化を遂げた時期であることがわかってくる。

まず、それまでO集落にあった役場がO集落とD集落とF集落の境界付近に移転し、高等学校と基幹学校がO集落とD集落にまたがる場所に設けられた。D集落域におけ

る人口増加に伴って、カトリック教会が新たに建てられてD集落が一教区となり、これに小学校も併設された。次に、全国的に実施された自治体再編によって、隣接する自治体がA町と合併することになった。また、町づくりのコンセプトが「自立した活気ある町づくり」に固まり、それに沿った宅地開発と景観維持が積極的に進められた。そして、自治体が合併し、人口が増加する状況のなかで、従来の「～集落民」と「被追放民」³¹⁾という住民呼称に加えて、新たな呼称が使われるようになった。ひとつは、合併前のA町住民を指す「Aの人」と、A町に吸収合併されたOB村の住民を指す「OBの人」という対の呼称である。もうひとつは、新規移住者を指す「ツージェツォーゲネ」³²⁾と、出生以来この土地に居住していて、A町に対する関心が高い者を指す「アインハイミッシェ」³³⁾という呼称である。つまり、この時期、住民の多様化が見られるようになったのである³⁴⁾。

こうしてみると、メイポールの盗み方をめぐる衝突に端を発した両集落間の対立の和解の時期が、A町の過渡期であったことがわかる。また、この時期にツージェツォーゲネと称される新住民が増加し、住民の生活様式も多様化した点に着目すれば、集落という単位は住民の生活に必須の区分ではなくなり、それに伴って、集落の自立性や自己理解を誇示することも以前のように重要でなくなったと考えられる。つまり、メイポールを介して集落が機能していることを明示することが、住民の多様化のなかでさほど意味を持たなくなったのである。

その代わりにメイポールが担うことになった機能は、転入してきた新住民や合併した隣接自治体住民に向けた、A町という自治体の自立性の提示である。

この町は、ミュンヘンのベットタウンと化すのではなく、自立した自治体を維持する町づくりの道を1960年代に選択し、その実現のために、ハード面では急激な人口増加を回避する宅地開発を実施し、景観保全にも取り組んできた。他方、ソフト面では住民の問題関心の喚起に力が注がれ、住民は、A町に関心を寄せ、よりよい住環境の実現のために社会活動や文化振興活動に関与することが期待されてきた。2004年のA町の市民集会で町長は、住民の無償の活動が活気ある自立した町づくりに不可欠であると述べた。これは、まさに行政のそうした期待を表したものである。

ところで、町長はこのとき、町内に残る祭礼や慣行といった伝統的なものの継承も理想の町づくりに欠かすことができないと発言した。これは、「伝統的なもの」は文化的であり、ゆえにその継承は町に文化がある証しだという解釈と、「伝統的なもの」の継承は住民が自分の土地に関心を寄せていること、つまり住民が町づくりに積極的に関わっていることのあらわれだという解釈の、2つに基づくものである。町長はこのときメイポールには触れなかったが、青年団は伝統的な慣行の担い手とみなされていることから、青年団がおこなうメイポールの慣行は自立的な町づくりに有益な伝統的な文化資源と解されているとあってよい。つまり、町づくりが意識的に推進されるようになって

以来、メイポールの慣行は、この町の自立性の一端を担い、その象徴のひとつと理解されるようになったのである。

メイポールがこのように町づくりに活用されるなかで、青年団員やかつての担い手たちの意識も変化した。先述のとおり、担い手たちはかつて自分たちの集落の自立性を隣接集落に向けて誇示することに執着していたわけだが、生活様式の多様化がすすみ、生活圏が集落にとどまらなくなった昨今、従来どおりのやり方でメイポールを立て替えることに価値を置きつつも、その誇示にはそれほど意味を見出していない。これに対し、「～集落民」であることの確認は、ある部分では以前より意識的になされている。以前では考えられないことだが、最近D集落青年団には、生まれ育ったのはその集落で、現在はミュンヘンに住んでいるメンバーがいる。彼らはふだんはD集落やO集落、ひいてはA町とかかわることなく生活をしているが、メイポールの立て替えには積極的に関わっている。それは、伝統維持に関心があり、家族や知人のいるA町やこの集落に愛着があるからだという。

担い手のなかにはこのほか、この慣行に関与することでアインハイミッシュェとしての自らの立場を確認する者もでている。アインハイミッシュェは、自分たちの土地に関する広範な知識を有し、土地に関心を寄せている、自治体が理想とする住民である。しかしながら、移住者増加の状況下においては、全人口に占める割合は低くなっており、いわばマイノリティになっている。そうした彼らが、知と愛着を存分に発揮することができる機会のひとつが、メイポールの立て替えなのである。

この慣行を担っている集落の青年団には、名目上は集落に居住する16歳以上の未婚男性であれば誰でも入会できることになっている。しかし実際には、出生以来その集落に居住し、父親もかつてそこで活躍し、入会以前からメンバーと面識のある者であることがほとんどである。したがって、この慣行は一部の住民によって担われているに過ぎない。しかし、立て替えやその後のダンスの披露の際に多くの観衆が集まることからわかるように、これに直接関与しない住民であってもメイポールに関心がないわけではない。彼らも、観衆としてその場に居合わせることで間接的にこの慣行の継承を担っているのである。また、なかには、居住する場所でそうした慣行が継承されていることを、自身の居住地選択を正当化するための要素とみなし、この行事を好意的に捉えている者もいる。

5 おわりに

本論では、ストリートでおこなわれる伝統的な行事であるメイポールを取り上げ、その社会的位置づけの変化をたどってきた。それは過去には、集落ごとの差異を象徴するものであり、そうであるがゆえに他の集落のメンバーによる奪い合いが繰り返しておこな

われていたのである。ところが、ミュンヘンの近郊に位置するという地理的条件により、大勢の新住民が存在するようになったことから、この行事は伝統的な慣行としては存続しているものの、その意味づけは大きく変わってきた。それは、親子代々その地に住んでいるか、生まれたときからその地に住んでいるアインハイミッシュェの優越を示すものとして、また、伝統が存続し、それゆえ文化が存在するこの町の豊かさを実証する事例として、解釈し直されてきたのである。

意味づけを変えながらも続けられているストリートでのこの実践は、ローカルな社会性の再生産の作業といえる。あるいは、アパデュライのいう意味でのローカリティの創造の営みといってもよいだろう。アパデュライはローカリティを、さまざまな実践がおこなわれる「土地」としてではなく、まさに文化的場としてのローカリティを産出さべくさまざまな実践がおこなわれる場としていうのである（アパデュライ 2004）。このローカリティの産出に向かう実践には日常性が色濃く反映されていることから、その解釈はつねにさまざまに読み替えられてきた。しかも、行為者自らの解釈であるため、それは許容されてきたのである。

ストリートは、私的空間でも公的空間でもないその間隙であり、複数の人びとが出会い、彼らが公衆としてふるまう場であるから、人びとの生活の奥深くにある解釈や実践が顕在化しやすい場である。人びとのローカリティに関する解釈とその変化をメイポールの実践から看取できたのも、そのためである。そして、ストリートという場やストリート現象がこうした特徴を持つからこそ、多様化がすすむ今日の社会状況の解釈は、そこでつくり出されるさまざまなテキストに間近から接することで可能になると思われるのである。

注

- 1) その集落の中心部にあたる教会前や居酒屋前のストリートや、辻の真ん中に立てられることが多い。ほかには、ストリートに面した居酒屋の敷地内に立てられていることもある。
- 2) マイバウムには、トウヒ（Fichte）の木が用いられることが多い。
- 3) 2色でらせん状に塗られているものがほとんどで、バイエルン州でみられるものには、州旗に使われている白と水色（weiß-blau）が、オーストリアでは国旗の色である赤と白が用いられる。
- 4) マイバウムには、自治体や集落のためのもの（Ortsmaibaum）と、居酒屋のためのもの（Wirtshausmaibaum）の2つがある。対象によって立てられる場所が異なっており、前者は、教会前、役場前、居酒屋前といった中心部、もしくは、辻や高台といったどこからでも見渡すことができる場所に、後者はその敷地内に立てられる。さらに中部ヨーロッパでは、婚姻を祝して当人の敷地内に樹木を立てる（Hochzeitsbaum）、子供が誕生するとコウノトリの飾りや乳母車を吊るした木を家の前に立てる（Geburtsbaum）、教会開基祭（Kirchweih）のときに教会前に樹木を立てる（Kirchweihbaum）といった、樹木立てにまつわる風習がある。
- 5) 以下の記述は、山田（2002）に基づくものである。

- 6) その結果、近年では地価の上昇が著しく、高級住宅地になりつつある。
- 7) このうち、北部の1集落と南部の全集落は、1978年の自治体再編でA町となった集落で、それ以前は、前者の1集落は隣接する自治体に属し、後者の5集落はひとつの自治体を構成していた。
- 8) プロテスタント教会は自治体内に1つで、A町が1教区になっている。
- 9) その集落や自治体を代表する／した職人や団体を表した金属製の装飾具。
- 10) 諺や格言、マイバウムを寄付した人の名前、立て替え年などが記された板。
- 11) これはマイバウムの先端に施される。代わりに、十字架がつけられるところもある。
- 12) これらは、修繕して、繰り返し使われる。
- 13) この青年団では、これらを、3月から毎晩おこなう見張り番のときの暖炉の燃料として使う。ほかに、集落の住民に買い上げてもらって、この慣行のための資金作りに役立てるところもある。
- 14) 雪が降り、寒さも厳しいこの時期は、作業のしやすい時期とは決して言えない。にもかかわらず、この時期に伐採がおこなわれるのは、冬至前後は樹木の水分が一年のうちで最も少なく、伐採が容易であるからだという。
- 15) 5月王は、青年団員のなかから選出されるこの慣行全般にわたる責任者で、準備にかかる経費の一部を負担したりもする。このほか、この慣行でパートナーを務める5月女王(Maikönigin)を指名する。そうした役職であるため5月王を務めることは、メンバーから信頼を受けており、統率力があり、経済的にも自立していることの証しになる。調査地では、次の立て替えの時には結婚をして退団していることが予想される年上のメンバーがこれになることが多い。
- 16) 切り払われた木々は、このあと約2ヶ月のあいだ、森に放置されるマイバウムとなる木の枕木として使用される。
- 17) それには、農夫、農婦、馬と、農夫、ビール醸造所、肉屋、パン屋、機械工、鍛冶屋、大工、車大工、仕立て屋、靴屋、石工、塗装工を象徴する道具がモチーフとして用いられていた。
- 18) A町D集落のマイバウムには、「この木は若者たちの団結と誠実さを新たに示す(Dieser Baum soll zeigen auf's neu, der Burschen Einigkeit und Treu.)」と記された板と、自治体内の2つカトリック教会、自治体のシンボルのひとつである貯水塔、この集落を代表する農家、この集落の居酒屋、開通当時の様子を表した機関車が描かれた5枚の板の計6枚が施されている。
- 19) 取り返すための交渉をせず、木の伐採からもう一度やり直すということもない。これは、マイバウムの立て替えに多大な労力が費やされることを示唆している。
- 20) 週末の夜はとりわけ来客が多く、朝までいる者もいた。ただし、こうしたやり方はここ20年ほどのことで、1980年代初頭頃までは、マイバウムの前に車を停めて、そのなかで寒さに凍えながら見張りをしていたという。
- 21) マイバウム立ての日は集落によって多少前後する。担い手の都合に配慮して、5月1日前後の週末におこなわれることは珍しくない。
- 22) この集落のマイバウム立てには重機は用いられない。青年団員と元メンバーが力を合わせて立てるのである。
- 23) 以前は、集落内の農家で鶏を飼っていたので、女性たちが各農家を周って寄付してもらっていた。しかし、今日は購入する。
- 24) マイナルとシュヴァイゲルトが論じている程度である(Meinl and Schweiggert 1991)。
- 25) 民族ならびに部族の運命と保護の樹のイルメンゾイレ(Irmensäule)、農家を保護する農家の周りに立てられた柱のヴァルトレット(Vardraed)が挙げられている。

- 26) モーザーによれば、愛の概念の誕生した16世紀には愛情・求婚の象徴(Liebesmaien)として、あるいは、戦争で移動する兵士が、同行する大佐や王侯、宿の提供者あるいはその村に対して敬意を示すために、宿泊した村落で樹木を立てることがさかんになされた。それが、彼らの移動によって各地に普及した17世紀には敬意の象徴(Ehrenmaibaum)として、フランス革命の影響をうけた18世紀終わりから19世紀初めにかけては自由の象徴(Freiheitsmaibaum)として、社会の「ゲゼルシャフト化」がすすんだ産業革命期にはゲマインシャフトらしさを想起させる道具として、また、国民国家が形成され、自治体再編がすすんだ20世紀初めには、それ以前の王国や旧来の集落の象徴として機能し、そして第三帝国期にはゲルマン文化の象徴としてゲルマン至上主義思想に流用されたという。
- 27) Hartinger (1992)。ただし、彼は、そこに民族性を見出そうとはしていない。
- 28) 注26参照。
- 29) 話し手によってその年代には多少差異がみられ、1940年代と言う者もいた。以下で挙げる語りで、年代に関する言及に異なりがあるのはそのためである。しかし、本文では語りをそのまま引用した。
- 30) カッコ内は筆者加筆。以下同じ。
- 31) 第二次世界大戦終戦後に旧第三帝国領のドイツ東部域から強制退去を命じられたドイツ国籍保有者で、彼らの多くは北部ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州と南部のバイエルン州に連行された。A町にも、1,000人以上の被追放民が連行された。
- 32) 「(よその土地から)引越してくる、移住する」という意味の動詞 zuziehen の過去分詞 zugezogen を名詞化したこの語は、まさに「移住者」という意味をもつ。
- 33) 「その土地(生まれ)の、土着の」という意味の形容詞 einheimisch を名詞化した単語で、「その土地の人」を意味する。
- 34) しかも、同一人物がその場面に応じて異なる呼称を担うことも珍しいことではなく、たとえば、「～集落民」であり、「アインハイミッシェ」とも「Aの人」とも自称する者がでてきた。

文 献

アパデュライ, A.

2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』 門田健一訳, 東京: 平凡社。

ギアツ, C.

1987 『文化の解釈学Ⅱ』 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳, 東京: 岩波書店。

Gemeinde Oberhaching (ed.)

1999 *Lebendige Heimat: Oberhaching*. Neustadt an der Aisch: Verlagsdruckerei Schmidt GmbH.

Hartinger, W.

1992 *Religion und Brauch*. p. 22, 57, 58. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Kapfhammer, G.

1982 Der Maibaum. Kritische Anmerkungen zu einem aktuellen Thema. *Schönere Heimat* 71: 332-335.

Mannhardt, W.

1904/1905 *Wald- und Feldkulte*. 2. Bände, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

Meinl, H. and A. Schweiggert

1991 *Der Maibaum. Geschichte und Geschichten um ein beliebtes Brauchtum*. Dachau: Verlagsanstalt Bayerland.

Moser, H.

1985 Volksbräuche im geschichtlichen Wandel. *Ergebnisse aus 50 Jahren volkskundlicher Quellenforschung*, pp. 199–269. München: Deutscher Kunstverlag.

タキトウス, C.

1979 『ゲルマーニア』 泉井久乃助訳, 東京: 岩波文庫。

山田香織

2002 「マイバウム——ドイツ・オーバーバイエルン地方における樹木儀礼の過程について」
『大学院論集』（日本大学大学院国際関係研究科）12: 189–219。

